

田舎も田舎。コンビニの一軒も無い、だけど病院のある、いつかは廃れるそんな島。強いて言えば、ふぐが売りの旅館がある。この一点について言えば、誇れる。

よそから来る人に言わせてみれば「海がキレイ」「砂浜がしろい」「自然がゆたか」「心が洗われる」「疲れがとれる」らしいけど、俺にはよくわからない感覚だ。小さな頃からそれが当たり前だからだろう。

俺は帰省していた。夏合宿終了後の、一週間の帰省の、初日。

普段は他県の高校の寮に住んでいる。走り回って泳ぎ回っていたおかげで、俺の運動神経はあまり並みとは呼べなくなり、いまや俺は水泳部の特待生としてそんな環境に身を置いている。

五時に起きた。習慣とは場所を変えても抜けないものなんだと知る。

麦茶を一杯注ぎ、それを片手に母親が寝ているはずの寝室を覗く。昨晩は夜勤だったようで、ぐっすりと寝ていた。なんとなく、白髪が増えてるように見えた。

散歩してきます、と書き置き、麦茶を飲み干してから家を出た。

鍵を閉めようとして、手が止まる。そうだ、この島には鍵を閉める習慣も、その必要もない。

埠頭を過ぎ去り、旅館を素通りし、漁師のおじいちゃんや旅館のおばちゃんに挨拶し、砂浜を横切り、坂を登り、両脇に木々が鬱蒼と生い茂った道をつくくと歩く。汗がじわじわと噴き出る。ころろなしか、高校がある地域よりも日差しが鋭い気がする。ただ、風がよく吹いているのが救いか。そして、蝉はもうどこかで鳴いている。

曲がりくねる道はおわり、まっすぐになる。先の方までよく見える。誰もいない。開放的で穏やかな気持ちになる。なるほど、よそから来る人たちはこういう気持ちになるのか。指を組み、背筋をぐっと伸ばす。自然と目を閉じた。背中がぼきぼきと音を鳴らした。

「……え？」

目を開けたとき、俺は目を疑った。さっきまで俺しかなかったその道に、人影があったからだ。それもキラキラと光るものを身に付けた、人影だった。人影までの距離は五十メートルもないくらいで、いつの間に現れたのかと思った。人影は女のものだった。俺は目がよく、それは今もよく発揮された。首周りで光るネックレスよりも、影よりもずっと深い色の黒髪に目を惹かれた。

相手はこちらに向かってきた。俺は立ち尽くしていた。急な出来事に困惑してたというのもあるかもしれない。近づいてくるほどに、女がとてもきれいなひとだと分かるほどに、身体は緊張で固まった。身長は俺よりもずっとはるかに低かったが、歳は彼女の方がずっと上のようだった。目の前にまで来て、彼女が訊いてきた。

「あの、ここってどこなのかしら？」

「……え？」

「わたし、どうやら迷子になってしまったようなの」

見た目も相まって、上品な話し方だと思った。まるでお姫様のようなども。